

平成29年度第4回北海道科学技術審議会 部会 議事録

日 時：平成29年10月24日（木）15：00～16：30

場 所：かでの2. 7 9階 920研修室

出席者：

（委員）尾谷部会長、荒川委員、大倉委員、西岡委員、長谷山委員、菅野特別委員、佐々木特別委員、末富特別委員、一入特別委員、松村特別委員

（事務局）青木室長、木下参事、小林参事

青木室長	<p>科学技術振興室長の青木でございます。</p> <p>ただ今から、北海道科学技術審議会 第4回部会を開催いたします。</p> <p>当審議会は、原則公開することとなっております。本日の部会につきましても、秘匿案件はございませんので、公開とさせていただきます。</p> <p>会議時間は、概ね17時頃を目途としております。</p> <p>それでは、ここから先の進行につきましては、尾谷部会長にお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。</p>
尾谷部会長	<p>では、早速議事に入らせていただきます。</p> <p>本日の議題は「次期北海道科学技術振興計画の原案」についてです。</p> <p>前回8月24日に、重点化プロジェクトを中心として御議論いただきました。その議論を踏まえ、本日は事務局から原案として示されております。</p> <p>本日の議論を経て、11月7日に親会である、審議会で議論されることとなっております。</p> <p>部会の開催も、本日と、来年の1月のあと2回を残すのみとなりましたので、委員の皆様には、様々な角度から、御意見をいただきたいと思っております。</p> <p>それでは、事務局から説明をお願いします。</p>
木下参事	<p>それでは、まず、重点化プロジェクト以外の部分につきまして、資料1から資料3、参考資料1と参考資料2に基づき、御説明させていただきます。</p> <p>本日の資料につきましては、事前送付したものに若干修正を加えましたので、委員の皆様には、本日用意いたしました資料をご覧くださいと思います。</p> <p>前回の8月部会では、計画の検討案をお示しし、主に、重点化プロジェクトなどにつきまして、御意見を伺ったところでございます。</p> <p>本日の部会では、前回の部会における御意見ですとか、7月に開催いたしました全道6か所の地域懇談会での御意見などを踏まえまして、重点化プロジェクトに係る考え方の整理ですとか、記載の追加・修正などを行いまして、原案としてお示しするものでございます。</p>

本日の部会での御意見を踏まえ、11月7日に、親会である審議会に提案したいと考えておりますので、委員の皆様には、御意見を頂戴したいと思っております。

まず、重点化プロジェクト関連以外の部分についてでございます。

参考資料1「第3回北海道科学技術審議会部会における主な意見」をご覧くださいと思います。

「4 委員からの主な意見」で、【重点化プロジェクト関連以外】であります。その一つ目の丸（○）で、「『Ⅶ 基本的な施策』のところで、北海道として科学技術の振興に向けて、こういった基本的な施策をきちんとやっていくという位置付けを書き込んでおいた方が良いでしょう」。

それから次に、「『Ⅶ 基本的な施策』の『研究開発に関する拠点形成』のところで、前回と今回では、今回は事業化、実用化のところはかなり注力しているという書きぶりにした方が良いでしょう。取り組もうとしていることは堂々と見える形での表記を検討すべき」といった御意見。

次に、「『Ⅷ 北海道内6地域における取組』については、6地域の特徴をきちんと表すような記載、この地域ではここに重点があるという項目立てで整理すると、このような章立てにする意味があり、また、『Ⅴ』の北海道の研究開発分野の中には、当然地域に関わっているものもあるわけで、地域独自の取組については『Ⅷ』でフォーカスを当てれば良いでしょう」といった御意見をいただきました。

こうした御意見を踏まえまして、検討案を修文いたしましたので、恐れ入りますが、資料2をご覧くださいと思います。

資料1は資料2の概要でございますので、本日は資料2のほうで御説明したいと思います。

まず、表紙をめくっていただきまして、資料2の目次でございますが、今まで、ローマ数字で表していましたが、例えば、「第1章」といった表し方にいたしましたところでございます。

内容につきましては、まず、恐れ入ります31ページをご覧くださいと思います。

「第7章 基本的施策」の一番あたりの文章で、「北海道における科学技術水準の向上とイノベーションの創出を図るため、道は、『研究開発の充実や研究成果の移転の促進』、『道における試験研究等の推進』、『産学官金等の協働の推進』、『知的財産の保護・活用』、あるいは『科学技術を支える人材の育成・確保』といった施策を科学技術の振興に関する基本的施策として位置づけ、関係機関と連携しながら、総合的かつ計画的に取組を進めていきます」と明確に記載したところでございます。

また、次のページの32ページをご覧くださいと思います。

「(2) 研究開発に関する拠点の形成」につきまして、一番上の〈北大リサーチ&ビジネスパーク構想〉につきましては、研究成果の事業化・社会実装を加速させるということ、2行目以下の、これまでの取組を強

化していくことを記載させていただきました。

また、二つ目の〈食と健康の達人拠点〉につきましては、FMIを拠点として、健康コミュニティの確立に向け、そこに記載しているような様々な取組を行っていくこと、それから、〈フード・コンプレックス〉につきましては、エリア・体制を拡充して、食品の付加価値の向上や研究開発などを推進していくこと、と文言を修正して、行うことをより明確化したつもりでございます。

なお、最後の〈橋渡し研究戦略的推進プログラム〉につきましては、11月にプログラムの具体が明らかにされる予定となっております、それを踏まえまして、いろいろ修文したいと考えております。

次に、42ページをご覧くださいと思います。

「第8章 北海道内6地域における取組」でございます。一番あたまのところ、北海道全体での、研究開発や重点化プロジェクト、基本的施策の展開と併せ、産学官金連携の拠点形成が進められている道内6地域においても、それぞれの地域について「主な機関の連携の姿」と「取組の基本的な推進方向」を掲げ、今後の取組を展開することといたしました。

なお、この章の内容につきましては、7月に行った地域懇談会でたたき台を示し、地域の産学官金の関係者から、今日は説明いたしませんけれども、参考資料2のとおり御意見を伺った上で、取りまとめたものでございます。

また、今回の原案につきましては、現計画と同様に、「第7章 基本的施策」に指標を設定いたしました。

具体的には34ページ、35ページ、36ページ、それから38ページと40ページでございます。

いずれも、平成34年、計画の最終年度の目標値につきましては、現在、調整中としております。

ここで、申し訳ございませんが、指標設定の考え方につきまして、資料3「次期科学技術振興計画の基本的施策における指標の設定について（案）」をご覧くださいと思います。

この「1 設定の目的」のとおり、道としての取組の目標をわかりやすく示し、推進管理を行う際の達成度を検証するため、設置するものでございます。

「2 設定の考え方」は、基本的施策の内容に沿った、毎年把握が可能で、他県とか全国との比較が可能なものとしております。

「3」の具体的な指標におきましては、「1 研究開発・成果の移転等」の1番目に「道内大学等における共同研究の件数」とありますが、従来は、道内大学を国立大学に限っていたものを、全ての大学と高専を含むものとしたしました。

また、次の新規と書いてありますが、「製造業の付加価値生産性」につきましては、AI・IoT等の普及による生産性の向上などを目指す観

点から、新規に設定することといたしまして、現行の「バイオ産業の売上高と従業員数」は、企業に対するアンケート調査であることや公表が最近不定期となっていることなど、課題が多いことから指標としての設定はやめることといたしました。

「2 道における研究開発」では、現行計画と同じ指標を設定いたします。

次に、資料の2ページで、「4 知的財産」とございますが、事前に送付した資料では、一番上を中小企業の知財全般の相談件数に変更する予定で、「知財総合支援窓口の相談件数」としておりましたが、現在、経産局などの関係機関と調整中であり、この度の資料では、現行計画の指標でございます、「特許流通サポーターによる特許流通相談件数」としております。

「5 人材育成」につきましては、現行計画で「中学・高校で理科好きのアンケート調査」がございましたが、調査が不定期のため、削除しました。

指標についての説明は、以上でございます。

またここで、資料2の原案に戻っていただきたいのですが、その他の修正事項でございます。

8ページの「第3章 情勢の変化」のところで、一番下、4番目でございますが、後ほど説明する、重点化プロジェクトにおきまして、国の「未来投資戦略2017」を踏まえて記載した部分が数か所ございまして、情勢の変化といたしまして4番目に「未来投資戦略2017の策定」を追加させていただきます。

主な修正箇所の後になります、10ページでございます。「第4章 基本目標」で、1番から3番まで「経済」、「生活」、「環境と調和した社会」の三つの目標のもとに、前回まで「VI 重点化プロジェクト」に置いていた「将来像」を、そのままこの第4章に移し替えて、掲載いたしました。

このことによりまして、基本目標と将来像の実現に向けて、「第5章」の主な研究分野と、「第6章」の重点化プロジェクト、「第7章」の基本的施策をそろって推進していくことが明確になったというふうに考えてございます。

重点化プロジェクト関連以外の主な修文箇所は、以上のとおりでございますけれども、9ページをご覧くださいますと、科学技術を取り巻く国と道の状況として表を入れたのと、あと33ページでございますが、こういった図表、それから35ページ、37ページにも図表を入れております。それから41ページに、今、評価していただいております北海道科学技術賞と科学技術奨励賞の受賞者、最近の5年間の受賞者の表、こういった必要な図表を追加したところでございます。重点化プロジェクト以外の関連につきましては、以上でございます。

尾谷部会長	<p>今、事務局のほうから説明ありました重点化プロジェクト以外の部分、前回皆さんに見ていただいた資料の修正部分を中心にですね、あるいは前回の部会で皆さんからいただいた意見を反映した形で修文をいたしましたという説明がございました。何か御質問、御意見、あるいは確認等がありましたら、いただきたいと思います。</p> <p>今回いただいたこれは、原案ということですから、例えば、細かく出ています数字の打ち方、1、2、3とか、片括弧、両括弧の使い方とか、これはもう、この形で決まりと理解していいですか。</p>
木下参事	<p>このような形で、整理させていただきました。</p>
尾谷部会長	<p>そうすると、例えば、この目次の2枚目、第6章だけ、「1-1」という表記が出てくるということですね。</p>
木下参事	<p>「2」とか「3」と表記することも考えたのですが、未来投資戦略に「1-1」という表記があったので、これ幸いと、このような形にさせていただきました。</p>
西岡委員	<p>今日のこの後の議論ですけれど、今、全体のお話をいただいて、この後は第6章の重点化プロジェクトの部分について、集中して議論するというイメージでよろしいですか。</p>
尾谷部会長	<p>はい。</p>
西岡委員	<p>では、一つ、二つ、お話をしたいなと思います。</p> <p>まず、全体の流れを見ているのですが、あまりストーリーができていないように見えます。内容が充実していないと言ったほうが、むしろいいのかなと思っています。今まで、私のほうから、ちゃんと章立てして、ストーリーを描いたらいいですよと、お話しさせていただきましたけれども、なかなかそのところができていないと思っています。というのは、例えば第3章で、いきなり情勢の変化、四つくらい項目が上がっていますが、これと基本目標がどうリンクするのは全然、触れられていません。</p> <p>章立てについてお話しすると、第1章は、いいでしょう。第2章も、これまでの取組と積み残しがちゃんと記載されているので、整理できていると思います。そういったことを踏まえて、第3章に情勢の変化があって、それを踏まえて、これから20年先、30年先にどんな社会が描けるのだろう、北海道としてどんな取組ができるんだろうとって第4章に展開していきますよね。そして、第4章ではそういう取組の目標を定めて、第5章で進めるべき研究分野、そういったものを明らかにしながら第6章の重点化プログラムに展開していく。そういう流れなのだろうと思って読み進めるのですが、第3章は「情勢の変化」で、第4章は「基本目標」。じゃあ、この「情勢の変化」と「基本目標」と、どうリンクするの</p>

	<p>か、そういったところが、随分、粗いと思っています。</p> <p>そして、第5章「北海道において進める研究開発分野」で、こういうことをやっていきたいと思いますとして、第6章「重点化プロジェクト」になったときに、例えば17ページ、1-1「食・健康・医療」分野で、また背景が出てくる。こういう「背景」、「北海道の課題」、「取り巻く社会情勢」というのは、前の第5章の中に包含できないですかね。ゼロクリアになって、文章を行ったり来たりしているように思います。書かれていることは非常にいいことが書かれているんだけど、常に振出しに戻って、また戻ってというのが、随分、散見されます。ちょっと一回、整理されたらいいかなと思っていました。</p>
尾谷部会長	事務局としては、いかがですか。
木下参事	<p>おっしゃられるとおり、この章立ては連続したものでございますので、第3章「情勢の変化」を述べる上で、やはり説明が必要かなと、冒頭の部分で、なぜ情勢の変化を語るのかということを書かなければいけないと思いました。</p> <p>第6章の重点化プロジェクトの背景につきましては、こういうことがあるから重点化プロジェクトに取り組むんだという、理屈立てでありますので、これを前の章に離すと、ちょっと遠くて、一体感がなくなるようにもなってしまいますので、なるべく簡潔に書いて、離したくないというのが、現時点での考えです。</p>
西岡委員	<p>皆さん、これ読みましたか。私は読みました。はっきり言って、嫌になりました。というのは、さっき話したように、またゼロクリアに戻っちゃうからです。せっかく積み上げて、研究分野も絞り込んで、さあ、重点化プロジェクト、何をやるのって見たときに、また現状と課題が出てくる。こういう文章の構成が、私としてはちょっと違和感がありました。</p> <p>あと、第6章の「重点化プロジェクト」に「2 推進に当たっての基盤的な力」というのが書いてありますが、重点化プロジェクトを推進するに当たって、こういうことが大事ですとした後に、第7章で「基本的な施策」を打ち出すという章立てにすると、この「基盤的な力」と「基本的な施策」とはどうリンクするのか、わからないんですよ。</p> <p>言葉尻を捕らまえて申し訳ないですけど、「基本的な施策」の中に「道における研究開発等の推進」という項目があったら、じゃあ、その他の「基本的な施策」は、道における研究開発の推進ではないのかって見てしまいます。ですから、工業試験場とか、道立試験研究機関の取組をきちんとやっていきますということを記載するのであれば、表現の仕方として、北海道の科学技術を推進していくための、いろんな仕組みづくりをやります、さらには掲げた重点化プロジェクトを展開するための仕組みとしても、こういったものをうまく活かしていきますとした上で、技術</p>

	<p>移転だったり、なんだったりと流れていくべきではないでしょうか。なかなか、そうはなっていないように思います。</p> <p>もうちょっと、そういったところを前後とうまくリンクできるような表現の仕方を工夫していただきたいというのが、私としての感想です。</p>
尾谷部会長	<p>今の西岡委員のお話についてですが、第3章の「情勢の変化」は、冒頭の前文なしに章に入っていますので、先ほど事務局から説明がありましたとおり、そこは修正をいただきたいと思います。</p> <p>それ以降、第6章で「重点化プロジェクト」に入ったときに、もう一度、各分野におけるということですが、背景、課題、北海道を取り巻く社会情勢というのが、おのおの四つのところで並列的に記載するような形になっております。</p> <p>この構成について、皆さんの御意見をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。</p>
一入委員	<p>私は西岡委員のおっしゃっていることは、ごもっともかなと思います。</p> <p>今までやってきたものに対して、当初、予定していたのとちょっと違う情勢の変化が出てきたから、新しい課題というのがそのときに出てきて、その課題について特に何をやりますっていうのを宣言したあとで具体的にしていくという意味では、その流れのほうがわかりやすいように思います。</p> <p>そうやって課題とか現状分析を予め示しておけば、具体的な施策を書いていくときに、また改めて、先ほどからおっしゃっている、振り出しに戻るといった形をとらなくてもいいように思います。</p>
尾谷部会長	<p>ほかの委員の方、いかがでしょうか。</p>
菅野委員	<p>この資料は誰が読むのでしょうか。と言いますのは、僕は正直言うとこれでもいいと思っています。もうちょっと丁寧に書いてほしいとは思いますが、わかるところを質問しながらであれば、これはある程度わかる気がします。</p> <p>ただ、これを見る人、例えば議員さん、一般人が見るとしたら、果たしてどうかなと。もうちょっと細かく、また、ちぐはぐなところをうまくつなげてもらえれば、いいような気がします。</p> <p>組み立て方については、下の基本施策があって、上に向かって組み立てていくか、上から下ろしていくかで、ちょっと書き方が違うような気がしますけれども、多分、下から上がっていったほうがわかりやすいかなという気がします。</p> <p>いずれにしても文章は、それだけで100%全部わかるというのは、なかなか難しいと思っています。</p>
尾谷部会長	<p>章立て、フレームのつくり方というのは、前々回のとき、皆さんに御議論いただいて、こういう形でいきましょうということになった。</p>

	<p>フレームについては、もうこの時点では、こういう形をとらせていただきたいと思います。</p>
佐々木委員	<p>私は、書き方としては悪くないと思っています。最初に強みや課題の話があって、その中の、今回のこの重点プロジェクトに関する部分をもう一回、つまみ出して、それについて、深めて話をするという書き方なのだろうと思います。多分、タイトルのつけ方が悪いのではないかなと思いました。</p> <p>「背景」で「北海道の強み」というと、また全体に戻るというイメージがしてしまうので、全体の中のこの「分野」に関する部分の話だということが、わかる書き方になっていけば、全体の中からつまみ出してもう一回、そこを説明します、詳しく説明しますという章立ては「有り」なのではないかと思います。</p>
末富委員	<p>私は西岡委員ほど読み込んでいなかったのですが、御指摘を受けて改めて見直してみましたところ、一貫して読む場合は、まさにそのとおりではないかと思いました。ただ、さっきの菅野さんがおっしゃった、誰が読むのかという話になったときに、じゃあこれを全部、連続して読むのかという懸念があると思います。</p> <p>やはり西岡委員がおっしゃったことは、書くものの連続性として、あるいは説得性としては非常に重要な話だと思います。ただし、改めてこの重点プロジェクトを見るときに、そういうものに触れていなければ、まったくそのベースがわからないということになりますので、その辺のバランスが必要なのかなと考えています。</p>
尾谷部会長	<p>わかりました。大体、委員の皆さんと、認識の共有が図られたようですので、事務局のほうで修正できるものは修正していただくということによろしいでしょうか。</p>
青木室長	<p>おっしゃるとおり、3章の部分は確かに書き込みが少し足りない部分があると思いますから、それは修正させていただきたいと思います。</p>
尾谷部会長	<p>ほかに、御意見はありませんか。</p>
西岡委員	<p>全然、違う話ですけど、絵があるといいですね。というのは、これが最終的にパブコメに出されると字ばかりで、研究者以外はきっと見ないと思うからです。そういった意味では絵があるとよくて、前回の親委員会でも確かどなたかおっしゃっていましたよね、絵を描いたらどうだって。やはり30年先、50年先の絵を描いておくことが大事で、例えば情勢の変化のところで、こういうふうな変化を踏まえた20年先、30年先にどんな社会が到来するんだろうというのをポンチ絵1枚で入れておくと、それに向かって北海道として強みを発揮しながら、それを実現するために頑張るんだという形が見えるので、どこか真ん中あたりに、全体</p>

	<p>を俯瞰する絵を1枚入れたらいいかなと思っています。</p> <p>例えば、情報通信白書の平成27年版に、30年先の情報通信、ICTを踏まえたらどんな社会が描けるかという絵が出ています。その絵を真似しなさいということではなくて、みんな考えるところは基本的に同じなので、そういったものをうまくモディファイしながら、北海道の強みを入れ込んでいくような絵を、ちょっと1枚いれておくと、すごくいいのかなと思っています。参考に持ってきましたので、これを見ておいてください。</p>
木下参事	<p>情報通信白書は見ています。</p> <p>それで、絵というか将来の姿についてですけども、第3章の情勢の変化は、我々がこれからいろいろ語っていく上で踏まえなければならないマグマみたいな下の動きだと思っています。そういう動きを、ICTの急激な進化だとか、グローバル化ですとか、あるいは地球環境問題の深刻化とか、もっと言えば人口減少とか高齢化の急激な進行という大きな問題がある。そういう問題を踏まえて語っていきましょうというのが、この第3章の役割で、未来の将来像を描いたのは第4章です。</p>
西岡委員	<p>いや、構いません、どこでもいいです。3章でなく4章でも構いませんので、この計画として、どこかに入れましょうということです。</p> <p>こういう未来の社会に向かって、我々北海道として、どんどん取り組んでいきたいという打ち出しをしておけばいいということです。将来像というのがここに、わざわざ記載されているので、この将来像を絵にするということを考えられたらいいかなと思っています。</p>
尾谷部会長	<p>読み手側の目線で、何を訴えているのかが1枚の絵柄でわかるような、そういうものが含まれているといいですねという御意見でした。ありがとうございます。</p> <p>ほかに、いかがでしょうか。</p>
松村委員	<p>すみません。修正点とかではないのですが、前回、聞きそびれたので、細かい点ですが、ちょっと何点か確認させていただいてよろしいでしょうか。</p> <p>基本的施策のところなのですが、これ具体的に目標達成するための施策をある程度、具体的に載せているというものだと思うのですが、33ページの「研究成果の企業への移転及び事業化・実用化の促進」というところで、下から二つ目<北海道発のベンチャービジネスの創出>のところですね、「産官金で設立したファンドなどにより」とあるのですが、これは道庁もLP出資をするベンチャー向けファンドを設立するというようなことを念頭に検討されているのでしょうか。</p>
木下参事	<p>そういった面もあり得るかもしれませんが、ここで念頭に置いたのは、現実として例えば釧路とか上川管内で、産学官金でベンチャー</p>

	<p>基金を設置して、地元支援している取組があるので、そういう取組のことを主に想定して書いたものです。釧路とか旭川でやっている、そういう取組が、これから広がっていくだろうなというふうなことを想定して書いた記載です。</p>
松村委員	<p>36ページの「産学官金等の協働の推進」のところの、主な取組の一番上の「イノベーション・エコシステム」の形成>ですけれども、これ、基本的施策全般に言えることなのですが、比較的詳しい具体的な取組が載っているものと、そうじゃないものがある、それはやむを得ないところもあると思うんですけれども、このイノベーション・エコシステムの形成については、「関係者が出口戦略を共有し」というところが非常にいいなと思っているんですが、では実際、このエコシステムの形成というのは、どういう形でやっていかれるのを目指すのでしょうか。</p>
木下参事	<p>文部科学省の事業に「イノベーション・エコシステム」という、そもそもの事業がございまして、それを北海道として、どこかに導入していきたいと、そういう意思表示で、対文部科学省とか、あるいは関係者の方に、宣言したと言いますか、そういう意味も含めて、ここに書かせていただきました。まさにその事業のねらいがここなので、それそのものの表現でございます。</p>
松村委員	<p>国の政策を、ということですね。</p>
青木室長	<p>国の事業をきっかけに、取組を展開していこうという趣旨です。</p>
松村委員	<p>なるほど。承知しました。</p>
尾谷部会長	<p>ほか、いかがでしょうか</p>
荒川委員	<p>ちょっと、よろしいですか。この「計画」と「概要版」というのは、ワンセットで表に出ていきますよね。</p>
木下参事	<p>はい。</p>
荒川委員	<p>「概要版」を見ながら、「計画」のポイントを見ていくと、大分「概要版」のほうの言葉遣いと齟齬がある。正直言って多いと思います。そこら辺をきちっとしないと、「概要版」のポイントを見て、「計画」を見ていったら、ないっていうのが結構あるんですよね。</p>
木下参事	<p>申し訳ございません。私のチェック漏れです。</p>
荒川委員	<p>具体的に言いますと、計画の33ページ1行目に「実用化の促進」とありますが、これは概要版5ページでは「実用化の推進」になっています。 それから、概要版の5ページ上にある「(1)研究開発に関する拠点の形成」は、これは完全にミスで、「(1)北海道の特性を活かした研究開発の</p>

	<p>推進」だと思えます。これは、かなり大きいところなので、概要版を見たら、計画のどこを見たらわかるよという形で、整合性をしっかりと取ることが大事です。計画と概要版とセットで見られる可能性あると思えますので。</p>
木下参事	<p>申し訳ございません。</p>
尾谷部会長	<p>御指摘ありがとうございます。</p>
一入委員	<p>細かい言葉の話でもよろしいですか。ちょっと専門的な話になりますけれども。</p> <p>「知的財産」と「知的財産権」というものが区別されずに、あっちこっちで使われていると思えます。例えば、新しい情報財という、ITを使った情報財は「知的財産」なのですが、それを守る手段は「知的財産権」という。「知的財産の創造」はいいのですが、保護するときは「知的財産権」のほうと、その使い分けはやっぱりあったほうがいいかなと思いました。全て知的財産でまとまっているので、果たしてどちらを言っているのか、わからないというところが結構あるように思いました。</p>
尾谷部会長	<p>それでは、予定していた時間も近づいてまいりましたので、次に進みたいと思えますが、よろしいでしょうか。</p> <p>では、本日の中心議題になりますけれども、重点化プロジェクトについて、改めて事務局のほうから説明をお願いします。</p>
木下参事	<p>重点化プロジェクト関連について、御説明申し上げます。</p> <p>まず、先ほどもご覧になりました参考資料1をご覧いただきたいと思えます。8月の部会での主な意見でございます。</p> <p>「重点化プロジェクト関連」の、まず、一つ目の丸（○）でございますが、「食・健康・医療」と「環境・エネルギー」の分野、それと「先進的ものづくり」と「AI/IoT等利活用」分野を次期計画の重点分野として決定していただきました。</p> <p>それから、重点化プロジェクトに関しまして、次の丸（○）のとおり、「重点化といった割には、あまりにも項目が多くて、重点化できていない。重点化プロジェクトをもう少し絞り込んで、具体的にした方が良い」といった意見ですとか、次の2ページのとおり、上から一つ目の丸（○）の3行目のとおり、「総論と各論が入り乱れている」、</p> <p>それから、次の丸（○）には、「分野によっては、すごく細かく見える記載がある」、「道の他のプラン、計画などと整合性を取るべき」、「北海道ならではの強みがわかる表現とした方がより説得力がある」、「AI/IoTについては、産業としてのITをもう少し出した方が良い」、「人材育成が大切」といった意見や、最後に、「何か夢のあるプロジェクトを重点化プロジェクトの中に入れておいてほしい」といった意見があった</p>

ところでございます。

こうした御意見などを踏まえまして、今回、取りまとめを行ったところでございますが、資料4をご覧くださいと思います。重点化プロジェクトの概要でございます。資料の真ん中に、「重点化プロジェクト」の「プロジェクトの構成」の構成のとおり、「食・健康・医療」、「環境・エネルギー」、「先進的ものづくり」の三つの分野に加えまして、これらに共通する基盤技術として、「AI・IoT等利活用」の4分野としております。

また、それぞれの分野において、例えば、「食・健康・医療」分野では、「食のバリューチェーンの構築」と「健康科学・医療融合拠点の形成」の2項目を掲げてございますが、4分野それぞれ2～3項目に絞りこんでいるところでございます。

各分野につきまして、具体的に説明いたしたいので、資料2の17ページをご覧くださいと思います。まず、最初は「1-1 食・健康・医療」分野でございます。「(1) 背景」の「ア 北海道の強み」として、食のブランド力、それから、これまでのこの分野の優れた研究成果、あるいは先端的な再生医療技術などを掲げております。

また、「イ 北海道の課題」として、食の高付加価値化、人材の確保、健康長寿社会の実現に向けた新たな産業の創出などを掲げたところでございます。

それから、「ウ 北海道を取り巻く社会情勢」としては、グローバル化の進展、健康や疾病に対する意識の高まり、フード特区計画の延長といったことを掲げております。

18ページに「(2) 『食・健康・医療』の分野の展開」を記載しております。第1の項目の「■食のバリューチェーンの構築」では、＜農水産業の生産性の向上＞といたしまして、1ポツ目で、工学と農学等の融合による1次産業のロバスト性の強化といった、現在、北大で構想している取組ですとか、2ポツ目で、安全で良質な農産物の安定供給のための技術開発や基盤的技術の開発、3ポツ目で、スマート農業に関連する研究開発を推進し、労働不足への対応などを記載しております。

次に、＜食の付加価値の向上＞として、1ポツ目で、食品の加工、保存技術や機器の高度化に関する研究開発、2ポツ目で、市場優位性の高い新製品開発、技術開発、3ポツ目で、ヘルシーDoの普及と発展に向けた研究活動などを記載しております。

次に、第2の項目の「■健康科学・医療融合拠点の形成」では、＜ヘルスイノベーションの推進＞として、1ポツ目で、ヒト介入試験システムを活用した機能性素材の発掘・開発、2ポツ目で、AI・IoT等を駆使した「セルフヘルスケア」の構築による個人の健康状態の最適化、3ポツ目で、ビッグデータを活用したヘルスケアサービスの導入に向けた基盤の構築などを記載しております。

それから、＜先端医療・医学の研究開発＞として、1ポツ目で、再生医療などの最先端シーズの早期実用化を図るための大学と企業が連携した研究開発、2ポツ目で、先端医療の開発拠点の形成、3ポツ目で、ゲノム医療クラスター創出に向けた関連データの蓄積とその活用、創薬・治験、診断薬の開発促進などを記載しております。

次に、20ページの「1-2 環境・エネルギー」分野でございます。「(1) 背景」の「ア 北海道の強み」として、気候や土地といった面でエネルギーに関する研究開発の適地であり、大学や研究機関で、この分野の研究開発が進められていることなどを掲げております。

「イ 北海道の課題」といたしましては、二つ目のポツに積雪寒冷地であり、分散型の地域特性により二酸化炭素排出量が全国平均より多い、それから、「ウ 北海道を取り巻く社会情勢」として、二つ目のポツにパリ協定の発効ですとか、三つ目のポツに、道内において水素関連ビジネスへの参入が進んでいることなどを掲げております。

それから、21ページ「(2)『環境・エネルギー』の分野の展開」で、一つ目の項目の「■エネルギー関連の実証・開発プロジェクトと生産開発拠点の集積」では、1ポツ目で、CO₂フリー水素サプライチェーンの構築などの各種エネルギー技術の開発や新エネルギーの多角的な活用による実証研究プロジェクトの集積、2ポツ目には、それと併せた道内企業の環境・エネルギー分野の参入促進や関連企業の誘致など、生産・研究開発拠点の立地促進・集積、3ポツ目には、電気自動車や燃料電池自動車と充電インフラの整備などを記載しております。

二つ目の項目の「■エネルギーの地産地消」では、1ポツ目で、地域単位での面的で効率的なエネルギーの活用を図る「エネルギー自給・地域循環システム」の構築や、2ポツ目で、複数の新エネルギーシステムや未利用エネルギーの活用技術、蓄電・蓄熱などと組み合わせたシステム開発や低コスト化などを、それから、22ページの三つ目の項目の「■エネルギーの効率的利用」では、1ポツ目で、地域や建築物における環境負荷低減の実現に向けた省エネルギーに関する研究開発、3ポツ目にはスマートコミュニティの構築に向けた寒冷地型スマートハウスの街区形成を目指した取組などを記載しております。

次に、23ページの「1-3 先進的ものづくり」分野でございます。「(1) 背景」の「ア 北海道の強み」として、企業立地に適した環境条件、広大な土地や冷涼な気候を背景とした28の自動車テストコース、理工系大学の多くの立地や四つの高専、IT企業の集積や航空宇宙関連の実験施設の整備といったことなどを掲げており、「イ 北海道の課題」として、担い手不足、加工組立型工業の割合が低いといった産業の構造的な問題、低水準の付加価値生産性などを掲げています。

それから、「ウ 北海道を取り巻く社会情勢」として、第4次産業革命

のイノベーションや、現場作業での機械化・高度化などのニーズの高まり、24ページには、自動車の自動走行に対する期待、衛星データ利活用などの関連技術の急速な進歩、大樹町における民間企業による小型ロケットの打ち上げなどを掲げております。

「(2)『先進的ものづくり』分野の展開」において、一つ目の項目「■ものづくり産業と1次産業等の連携による生産性の向上」では、1ポツ目で、自動トラクタの実証実験・社会実装、2ポツ目で、水産資源管理システム、3ポツ目には、適切な森林管理、4ポツ目には、野菜・水産物等の選別調整作業や異物検査などにおけるAI・IoT等の利活用、25ページの1ポツ目では、製造業における基盤技術力の強化や、1次産業の生産性の向上に資する機器・システムなどに関する研究開発、「北のものづくりネットワーク」を活用した、食品や機械、ITなど産業間の連携によるマッチングや製品開発の取組などを記載しております。

二つ目の項目「■自動車の自動走行に関する研究開発の推進」では、1ポツ目で、自動走行の実証試験の誘致など研究開発面から本道への自動車産業の集積と、2ポツ目の自動走行の研究開発の実証モデルの構築や事業化、社会実装などを記載しております。

三つ目の項目「■航空宇宙分野における研究開発・実証」では、1ポツ目で、大学等による実験・実証事業などの誘致や、民間事業者によるロケット打ち上げに対する支援、2ポツ目で、先進的な衛星データ利活用技術などの研究開発や実証、3ポツ目には、道内企業の航空宇宙産業への新規参入促進に向けた産業支援機関や道総研との連携、ものづくり企業の技術力・提案力の底上げなどを記載しております。

26ページの「1-4 AI・IoT等利活用」分野でございます。

「(1) 背景」の「ア 北海道の強み」として、道内の多くの大学や高専において、AI・IoT等の先進的な研究開発や人材育成が行われていること、IT企業やデータセンターをはじめ情報産業の集積に向けた企業立地が進められていること、「イ 北海道の課題」として、第4次産業革命への期待が高まっている中で、専門人材が不足しており、産業・企業への円滑な技術移転やシステム導入への障害となる恐れがあること、「ウ 北海道を取り巻く社会情勢」として、2ポツ目で、少子高齢化などによる、労働力不足問題が顕在化している中、多様な人材の活躍や生産性の向上による働き方改革が喫緊の課題となっており、特に、生産性の向上については、ICTなどを活用した省力化・効率化に向けた取組が重要となっていること、27ページでは、地域交通ネットワークや観光情報の発信、災害発生予測などで、AI等の技術活用が期待されていること、官民データ活用推進基本法の制定に伴い、オープンデータの推進に向け、平成29年度に基本計画を策定することなどを掲げております。

「(2)『AI・IoT等利活用』分野の展開」におきまして、一つ目の項目「■産学官連携による先進技術の事業化やデータの利活用」では、

1ポツ目で、研究成果の事業化・実用化に向け、産学共同の研究開発を推進するとともに、事業化・実用化の成果事例の紹介など研究開発のフォローアップ、社会実装の実証モデルの構築、2ポツ目で、道総研や産業支援機関の連携による大学等の研究開発成果の普及啓発や技術指導、3ポツ目には、道が保有するデータのオープンデータ化などを記載しております。

28ページで、二つ目の項目「**■データ・サイエンティスト等の専門人材の育成**」では、1ポツ目で、大学等における教育コンテンツの充実や、産学官が連携した技術者養成講座等の実施、2ポツ目で、大学と企業のクロスアポイントメント制度の情報共有と制度の普及促進などを記載しております。

三つ目の項目「**■A I・I o T等の利活用による地域社会の活性化**」では、1ポツ目で、インフラの維持管理や、高齢者の見守り、交通施策選択システム、産業振興施策の策定など行政を支援するツールの開発、2ポツ目で、競争的資金や国の支援制度などを記述しております。

なお、各分野の最後に、参考指標を囲みで表示しておりますが、指標の項目と現状値を記載いたしました。目標値につきましては、取組の成果の数値化が困難でございまして、貢献の方向性を示すにとどめたところでございます。

次に、29ページの「2 推進に当たっての基盤的な力」をご覧くださいと思います。重点化プロジェクトを推進する上で、関係者が共通して持つべき視点として、三つの「基盤的な力」として掲げたものでございます。

まず、一つ目の項目の「**■本格的な産学官連携の推進**」であります。オープンイノベーションを推進していくため、「組織」対「組織」の共同研究の活発化、道内大学と道総研等が連携した研究開発、オープンイノベーションにおいても、新しい技術や重要な知見についての、適切な特許等の出願や管理といった知的財産の取得・保護・利活用などを記載しております。

二つ目の項目の「**■地域におけるイノベーションの創出**」では、大学の研究シーズと企業のニーズのマッチングのため、産と学をコーディネートする機能の強化や、中核的な機能を担う産業支援機関の専門人材の育成、公設試研究機関の技術指導・助言機能の強化、大学の技術シーズの一層の活用に向け、「北のものづくりネットワーク」の専門家等による個別・集中支援、大学発ベンチャーの創業などにつなげる取組などを記載しております。

30ページの三つ目の項目「**■科学技術人材の育成・確保**」では、状況変化や新しい課題に柔軟かつ的確に対応ができる人材の育成のため、A I・I o T等の先端技術に関する専門人材の育成、マーケットインの発想とともに、法務分野にも精通する、技術シーズの事業化を支える人材の育成・

	<p>確保、大学等におけるアントレプレナーシップ教育の充実や、起業家マインド、事業化志向を有する若手研究者の育成などを記載しております。</p> <p>以上で、重点化プロジェクトに関する資料の説明を終わらせていただきます。</p>
尾谷部会長	<p>それでは、今、御説明いただきました第6章「重点化プロジェクト」について、御意見をいただきたいと思えます。</p> <p>まず、1-1「食・健康・医療」分野に関してはいかがでしょうか。西岡委員、何かコメントございますでしょうか。</p>
西岡委員	<p>よくまとまっているな、という印象です。</p> <p>前回部会の時点では、重点化プロジェクトに戦略Ⅰと戦略Ⅱがあって、ⅠとⅡの違いは何なのかという議論がありましたが、今回、全部すっきりしているし、項目として整理ができていますので、見せ方としてこういうものが出るのであれば、全然、問題ないと思っています。</p>
尾谷部会長	<p>次に、1-2「環境・エネルギー」分野ですけれども、こちらのほうはいかがでしょうか。</p> <p>北海道は日本の中でも、様々な可能性が高い地域かなということで、正面きって「環境・エネルギー」という項目を掲げている地方自治体はそんなにないのではないかと思いますけれども、いかがでしょう。</p> <p>参考指標として、いくつか数値が記載されていますけれども、道としてエネルギーの数値目標は持っていませんでしたか。</p> <p>もし、道の具体的な数値目標があるのであれば、科学技術振興計画としても、それに向かって進めていくという整理ができないでしょうか。</p>
青木室長	<p>基本的な施策については、目標を立てようと思っていますけれども、全ての施策につけられるかというと、それは難しいところです。</p> <p>「環境・エネルギー」分野については、道の総合計画で、温室効果ガス排出量の目標値を定めていたはずで。</p>
尾谷部会長	<p>ありましたよね。</p>
木下参事	<p>道の総合計画は10年計画のため、目標年度が2025年度、平成37年度となっています。</p>
尾谷部会長	<p>科学技術振興計画よりスパンが長いのですね。わかりました。</p> <p>御意見等、いかがでしょうか。</p>
荒川委員	<p>今の話に関連して、参考資料やなんかの数値についてですけれども、出典というか、どこが出したものなのか明らかではありません。</p> <p>例えば「食・健康・医療」分野で、食料自給率が200パーセント、食品工業の出荷額が全国2位とありますが、この根拠は、いつの、何なのか。文章にすると見逃してしまうので、しっかりと出典と何年のデータだというのをお示しいただいたほうが良いと思えます。</p>

木下参事	文中に書いてある文言で、非常に難しい言葉については、アスタリスクをつける作業を進めていますが、まだまだ足りていない部分もありますし、今、荒川委員がおっしゃったような数字の根拠につきましても、御意見を踏まえまして、書き込むようにしたいと思います。
荒川委員	年度が随分昔だと、なんでこんな指標ここに載ってくるのということになりかねないので、よろしくをお願いします。
尾谷部会長	今の話は、最終的には用語解説と引用文献をまとめて記載することですね
荒川委員	すでに書いてあるものもありますが、書いていないものもあるので、その辺の整理をどこかの時点でやる必要があると思います。
青木室長	本文に起こすか、後ろに記載するかは別として、いずれにせよ、改めて読んでみて、専門用語があまりにも多く、普通には通用しないと思っていますので、用語解説はつくりたいと思います。
木下参事	用語解説をするとともに、出典を明らかにしたいと思います。
尾谷部会長	次に、1-3「先進的ものづくり」分野、これはいかがでしょうか。 前回の部会では、自動車に関しては北海道と何のつながりがあるのかというのが、皆さんの中にあっただのかなと思いますけれど、いろいろ調べていくと、この2ポツ目に書かれているように、いろんな先生方が、自動運転を含めた研究を進めているようですし、また、それを受ける企業の方々も背景にあるということで、必ずしも、ただ寒冷地のフィールドを提供するだけではなくて、ものづくりということで北海道もコミットできるのかなと思っていますところ。 御意見等ございませんか。では、もしありましたら、また後からでも御発言いただきたいと思います。 では次に、1-4「AI・IoT等利活用」分野について、いかがでしょうか。
菅野委員	せっかく外出したようなところもありますので、この参考指標の中に何か企業的なものを取り込めないでしょうか。 ITC協会では、産業売上高などのデータをとっていますので、そういったものを利用してもらうことはできないでしょうか。
木下参事	ちょっと検討させていただきます。
青木室長	菅野委員のほうから、どんなデータがあるのか、御提供いただくことはできますか。
菅野委員	ITレポートに総売上とかありますし、いろんなところでデータをとっています。

尾谷部会長	企業数や、関わっている技術者といった統計もありますよね。
木下参事	ITレポートを見て、検討したいと思います。
菅野委員	そうですね、ちょっと検討してみてください。
尾谷部会長	ほかに、いかがでしょうか。
松村委員	<p>ちょっと確認させてください。「AI・IoT等利活用」分野以外の、ほかの分野でも共通する話なのかもしれないのですが。</p> <p>最初に、「北海道の強み」というところで、何項目か上げているのですが、この中には、定量的な裏づけのある本当の強みと、一方でSWOT分析で言えば、機会とか環境なのではないかというようなものがあるような気がしています。</p> <p>これは、私自身もよくわからないので教えていただきたいのですが、例えば、このAIのところの一つ目と二つ目のポツで、大学とか高専でAIやドローンの研究が進んでいるとありますが、これって割と全国いろんなところでやられているような気がするのですが、これは本当に、北海道は全国と比較してもかなり強みがあるという、何か定性的あるいは定量的に言えるものがあるのでしょうか。</p>
木下参事	<p>一つの都道府県の中に、これだけ理工系大学があるというところは、ほかにないだろうと。それと、高専も4高専あるというのではないだろうということは思っています。実際に、各学校でAI・IoT関係の取組がなされていますので、「他府県より」という話ではなくて、そういう力をもっているという形で、定性的に書かせていただいたものです。</p>
尾谷部会長	<p>ほかに、いかがですか。</p> <p>IT企業の集積ということでは、どうですかね。他府県の業者と比較した、北海道の状況というのは。</p>
菅野委員	<p>集積しているほうだと思います。売上ベースとか産業ベースではちょっと神奈川とかにかないませんけれども、ある程度、特色があると思いますし、そこをうまく我々業界的にも活かしていきたいと思います。</p>
末富委員	<p>ちょっと、いいですか。さっきの松村委員がおっしゃったことで、そうかなと思ったのですが、強いとか弱いというのは、数値で表せないものではないでしょうか。例えば、人口一人当たりの何とか、さっきの学校の話であるとか、売上の話であるとか。</p> <p>最近、実施評価に基づく政策立案というのが非常に注目されていて、おそらく道庁もその方向でいくのでしょうかけれども、そうであればやっぱり、説得力のある数字を、出せるものと出せないものがあるでしょうから、全部やれという話じゃないですけども、数値で出せる部分については、北海道ではこういう数値が出ていて、非常に強いですよと、だか</p>

	ら伸ばしたい、だからいいですよという表し方、ちょっとできないのかなというのを思いつきました。
尾谷部会長	ありがとうございます。 ほかに、いかがでしょうか。
西岡委員	<p>普通、科学技術の関係の強みといたら、研究者の数とか、論文数とか、それからその研究者も、かなり著名な先生がいるとか、企業数、企業がちゃんとそろっているとか、そういう一定のファクターがあると思うんですよね。そういうものを、ある程度整理されて、そういったものを今のお話じゃないけども、定量、数値としてどんどん出しといて、北海道としてはやっぱりこれだけの強みがあるってことを示すことが必要だろうなと思っています。</p> <p>結構、著名な先生って、やっぱりいますでしょ。そういう先生を何人か数え上げれば、ある程度、数値としての評価もできるんじゃないのかなと思ってはいるんですけど。</p> <p>ただ、こういう事象です、ああいう事象です、での北海道の強みっていうのは、なかなか弱いなと思っています。</p>
木下参事	例えば論文数についてですが、JSTなどは全国的な論文数を調査していますけれど、あの件数は道内分の数字がとれるのですか。
西岡委員	それはわかりません。あと、論文によってもインパクトファクターがあるので、そこはもうちょっと調べてみたらいいんじゃないですかね。論文数に拘泥する必要は何もないので、このくらいのポテンシャルがあるんだっていう話をされるほうが、きっといいでしょう。
尾谷部会長	今までも、科学技術振興計画をつくるときのベースに使っていませんでしたか。大学の数がこうで、研究員がこれくらいといった数値は、ありませんでしたか。
木下参事	研究員の数までは、載せていなかったと思います。
長谷山委員	教員数は、出していたのですか。
木下参事	出していないと思います。
長谷山委員	<p>大学基本調査で、全部の大学、教員数はオープンになっているので、それほど無理なく調べられると思います。</p> <p>あと、論文数は労力がかかります。論文数は、道内全ての大学にコールをかけて、出てくるかどうかわからない。うちの大学は全部ワンストップでお出しすることになると思いますが、どういうふうにするかは言っていないと、総長が了承するかどうかわからないですけど。</p>
木下参事	研究者、教員数は、確かに統計数値がありますので、トピック的に記載

	させていただくのもいいのかなというふうには思います。
長谷山委員	理工系の割合については、多分、多いのだろうと思います。
木下参事	研究者の数で、でしょうか。
長谷山委員	<p>全体の都道府県に分けたときに、全体の教員数において理工系の割合が多いという数字にはなるんじゃないかと私は予想します。</p> <p>先ほどの高専ですとか、工科大学だとかというものが多く、我々の北大も理工系が多いので、それはポテンシャルがあるんだという数字にはなるのかなと。</p>
佐々木委員	<p>先ほどから指標関係の話が出ていますが、28ページにある「道内大学における共同研究数」と「年間総労働時間数」が「A I・I o T等利活用」分野の参考指標として、ここにあるのはちょっと違和感があります。</p> <p>この二つは多分、重点化プロジェクト全体に関する参考指標になるのではないかと思います。</p> <p>この二つを参考指標として挙げるのであれば、もっと別のところに持っていか、「A I・I o T等利活用」分野については、先ほど菅野委員から出ていたようなものも含めて、別の指標に見直したほうがいい。ここにあること自体、ちょっと違和感があるなと思います。</p>
木下参事	わかりました。
尾谷部会長	これは、「A I・I o T等利活用」分野の共同研究数というデータがあり、それを上げるぞという意味合いとは違うんですね。
木下参事	違います。
佐々木委員	全体の共同研究数ですよ。
尾谷部会長	それでは、ちょっと、そぐわないですね。
木下参事	適当な指標がなくて悩んだ結果、これを使ったものです。申し訳ございません。
長谷山委員	<p>いいかどうかはわかりませんが、A I・I o T等の利活用で、共同研究というのではなくて、例えば道内大学の外部資金調達というふうにすると、A I・I o Tだと数理関係のカテゴリライゼーションの中での予算額というのは、確かJ S Tで、科研は少なくともファンドが出て、量が出ているので、文部科学省による科学研究補助金はいくらくらいみたいな、ポジティブかどうかはわかりませんが、でも置き換えるとすると、見つけやすいです。資金も件数も全部、出ていますので。</p>

尾谷部会長	<p>ほかに、いかがですか。参考指標以外のところは、大体このような記載でよろしいでしょうか。</p> <p>それではもう一度、この重点4項目挙げましたけども、もし、お気づきのところがあれば、最後にお聞きしたいと思いますが、いかがですか。</p> <p>よろしいですか。それでは、本日の議題に関しましては、これで終了したいと思います。</p> <p>本日いただいた御意見を踏まえて、事務局のほうで修正、原案づくりを進めていただきたいと思います。</p> <p>事務局のほうから、今後のスケジュールについて説明をお願いします。</p>
木下参事	<p>それでは参考資料3により、今後のスケジュールを御説明いたします。</p> <p>次の部会は1月16日15時からの開催を予定しておりますので、よろしくお聞きしたいと思います。その際には、原案の答申案として、お示ししたいと思っております。</p> <p>それが終わったあと、第4回の審議会を1月29日15時から予定しております。</p> <p>それから、道としてのスケジュールですが、道議会にも報告いたしまして、11月の末にはパブリックコメントにかけたいというふうに考えておりますので、御承知おきお聞きしたいと思います。</p>
尾谷部会長	<p>それでは今日予定していましたが、以上で終わらせていただきたいと思います。</p> <p>道のほうから、何かありますか。</p>
青木室長	<p>皆様から大変熱心な御議論、御意見をいただきましてありがとうございます。</p> <p>本日いただいた意見を踏まえまして、整合の取れていない部分を直すですとか、言葉遣い、ポンチ絵のことも含め、検討させていただきまして、11月7日の審議会のほうに、部会で御意見をいただいたものとして、提案をさせていただきたいと思っております。</p> <p>修正して親審議会に諮る原案に関しましては、皆様のところにも同じものをお送りしたいと思っておりますので、引き続きよろしくお聞きしたいと思っております。</p>
尾谷部会長	<p>これもちまして、本日の部会を終了させていただきます。</p> <p>どうもありがとうございました。</p>